

堀口捨己の初期住宅作品における構成的特徴の展開について

小出邸から紫烟荘へ

窪田 光佑*・河田 智成**

(令和元年10月31日受付)

On the development of the compositional characteristics in Sutemi Horiguchi's early residential works From "KOIDETEI" to "SHIENSOU"

Kosuke KUBOTA and Tomonari KAWATA

(Received Oct. 31, 2019)

Abstract

The purpose of this paper is to examine Sutemi Horiguchi's "KOIDETEI" and "SHIENSOU". In doing so, the development of the compositional characteristics in his early residential works will be clarified. In his compositional characteristics I focus on floor composition and volumecomposition. At the same time, I study the relation of the parts to the whole. The parts and the whole of "KOIDETEI" conflict with each other in floor composition and volume composition. They're not related. The parts and the whole of "SHIENSOU" balance each other in floor composition and volume composition. He related them. Horiguchi gained a perspective in which he dealt with the relationship between floor composition and volume composition from "KOIDETEI" to "SHIENSOU".

Key Words: plan, volume, part, whole, gap, grid

1. 序

堀口捨己(1895-1984)は、日本の伝統に根ざして近代建築を模索した建築家であり、建築史家・庭園史家としても知られている。彼は公共施設だけでなく生涯をかけて数多くの住宅を手掛けている。本論では、その住宅のなかから初期作品に位置付けられる小出邸と紫烟荘を取り上げ、部分と全体に着目して、その関係性を明らかにする。さらに、これを整理し、両作品を比較することで、堀口の初期住宅作品における構成的特徴の展開を示すことが、本稿の目的である。

小出邸と紫烟荘は、初期住宅作品であると同時に、堀口

を語る上で重要な作品である。堀口はヨーロッパへ留学を機に、1924年に『現代オランダ建築』¹⁾を出版する。その翌年に小出邸を、さらにその翌年に、紫烟荘を制作している。両作品は、堀口が実作経験の少ないなかで、ヨーロッパの新建築に刺激を受けながら、試行錯誤の末に完成させたものである。実際、『建築画報』誌には、小出邸の手法を紫烟荘でも用いたことが記されている²⁾。紫烟荘は、小出邸での経験を省みて、堀口が自らの意図を実現できるように試行錯誤したものである。よって、小出邸と紫烟荘とのあいだには、堀口初期に通底する建築手法とその展開が認められるであろう。両作品は堀口初期を知る上で、重要な建築作品であると考えられる。

* 広島工業大学大学院工学系研究科環境学専攻博士前期課程

** 広島工業大学環境学部建築デザイン学科

堀口捨己については既に多く論じられてきたが³⁾、そのなかに、藤岡洋保『表現者・堀口捨己 —総合芸術の探究—』⁴⁾がある。藤岡は、小出邸と紫烟荘を作品として分析するだけでなく、それに関わる堀口の言説についても分析している。しかし、小出邸と紫烟荘の個別分析にとどまっており、両作品を比較した研究は見受けられなかった。本稿では、既往研究を基にしながら、両作品の平面構成、ボリューム構成に着目して、それらの部分と全体をめぐる構成的特徴について明らかにしてみたい。

以下、次のように論じていく。第2章では、小出邸を取り上げる。小出邸の各部屋を概観し、小出邸の平面構成、ボリューム構成における部分と全体の関係を分析する。第3章では、紫烟荘を取り上げる。紫烟荘の各部屋を概観し、紫烟荘の平面構成、ボリューム構成における部分と全体の関係を分析する。第4章では、小出邸と紫烟荘の構成的特徴を比較する。最後に、小出邸と紫烟荘の構成的特徴を振り返り、これを堀口の初期住宅作品のあいだにある構成的特徴の展開として示す。

2. 小出邸の分析

小出邸⁵⁾は堀口が初めて設計した住宅であり、恒久的な建物としても処女作である。1925年に竣工し、木造一部2階建となっている。外観の特徴は、宝形屋根と水平にのびた軒である。屋根は黒っぽい瓦で、壁は白の漆喰によって仕上げられている。(図3-a)

2-1. 小出邸各部屋の概要

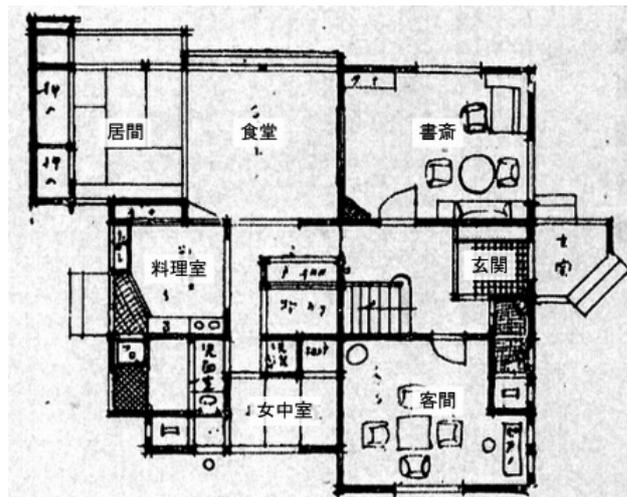
玄関のアプローチは2つあり、北に向かって配置されているものと、建物の側面に沿っているものがある。玄関には、傘立てと一体となった靴箱があり、椅子ほどの高さにつくられており腰掛けることができる。(図3-b)

客間のつくりは、洋風となっており椅子に腰掛ける仕様となっている。客間では、四角い卓を用いている。壁紙は、無地の壁紙張り、一部もみ縮付きの銀箔置きを使用することで変化をつけている。椅子の木部は黒を基調とし、布は無地の赤としている。堀口は、赤や黒といった強い配色によって、部屋をまとめている。(4-d)

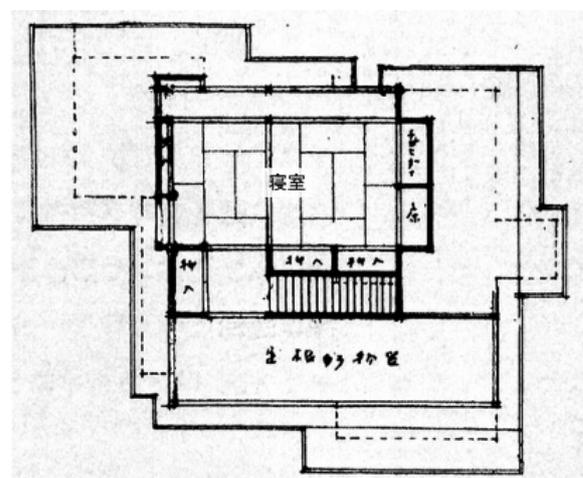
書斎のつくりは、客間と同様の仕様となっている。木枠の格子が施されている。また、暖炉が設けられ、テクスチャーにより隅切られている。書斎では、丸い卓を用いている。書院造りの違い棚のような、壁から水平に取り付けられた棚が設けられている。

食堂のつくりは、洋風となっており、出窓を設けている。

居間は、4.5畳の和室に加え縁側を設けている。庭に向かって開く縁側やふすまは、仕切りながらも繋がることによって、開放的な空間となっている。



a. 1階平面図



b. 2階平面図

図1 小出邸平面図

料理室は、居間と食堂に隣接した部屋となっている。さらに、勝手口により外と繋がっている。

女中室は、3畳の和室に柵戸が設けている。そして、トイレや風呂など水回りと隣接している。

寝室のつくりは、6畳と8畳の和室が一体となった部屋となっている。また、2階にありプライベートな空間となっている。

2-2. 小出邸の平面計画について

次に、上述した部屋の平面計画上のまとまりを見ていく。小出邸は、全体を大きく3つの種類のまとまりに区分することができる。

1つ目に、書斎や客間、玄関ホールのまとまりが挙げられる。これらは、均一な幅により統一感を与えている。また、各部屋の家具は、座椅子といった洋風のつくりとなっており、同じ形態の一因となっている。

2つ目に、食堂と居間は、同じまとまりと見ることがで

きる。両者は、均一な奥行によって、前者と似たような性質を持っていると思われる。しかし、出窓や床の間のような副次的要素によって部屋の輪郭を拡大しているため、前述の形態とは別のまとまりと見做し得る。

3つ目に、料理室や女中室、物置は、同じ種類のまとまりと考えられる。各部屋は、幅や奥行に規則性が見られないものの、集会的にはまとまっている。そのため、他の2つのまとまりとは別の種類である。(図2)

2-3. 小出邸の部分と全体について

部屋と家全体に着目し、部分と全体の関係を分析してみる。客間の内部は、壁や天井を木枠の格子によって、部屋全体を統一されている。また、客間や書斎の平面計画の一部にも同様の統一の仕方が見られる。しかし、格子を家全体にまで広げて見てみると、格子の単位や軸が変化しズレが生じている。(図2, 3-d)

次に、食堂と料理室について見ていく。両者のあいだで、食堂が料理室の収納奥行分だけ調理室側に貫入しており、食堂と調理室の隣接部分にズレが生じている。そのズレは、食堂の貫入部分が隅切られることで、内部に吸収されている。これを家全体として見ると、部屋同士の衝突が緩和されているとも解釈できよう。(図2)

書斎と食堂、居間について見ていく。食堂と書斎が同じ洋風のつくりなのに対し、居間は和風のつくりとなっている。したがって、部屋のつくりから見ると、書斎と食堂のまとまりと、居間が区別される。次に、この3部屋のあいだの仕切りの共通性に着目してみる。襖の仕切りは、各部屋の独立性を保ちながら、開放時に生じる軸が3部屋を貫くことで、3部屋のあいだに連続性を与えている。

さらに言えば、小出邸においては、平面計画上の1つ目のまとまりと2つ目のまとまりは、書斎を要にしながら緩やかに繋がれていると解釈できるだろう。(図2)

2-4. 小出邸の構成的特徴について

最後に、小出邸の構成的特徴をまとめてみたい。

まず平面構成を見ると、計画上3つのまとまりがあった。これらのまとまりは、それぞれ平面全体の枠組みに収まったり、枠を破って凸出したり、凹んだりしている。枠組みの拘束力は弱いと言える。部屋の隅切りによるズレの吸収や軸による部屋のあいだの連続性の付与なども認められるが、全体として、部分である部屋の独立性を保って平面計画していると言える。すなわち、平面構成においては、部分が全体より強調されている。(図2)

次にボリューム構成を見ると、家全体は宝形屋根を中心に据え、そこに水平の軒を付随した構成となっている。幾何学的な宝形の屋根は、強い中心性によって、これを破る

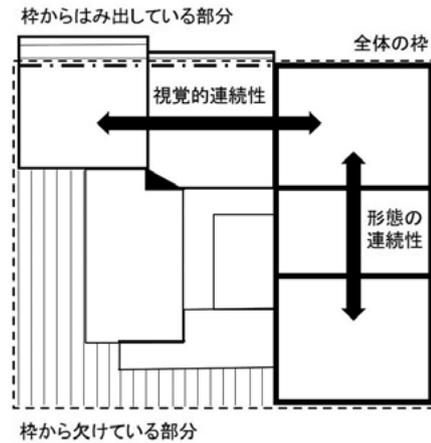
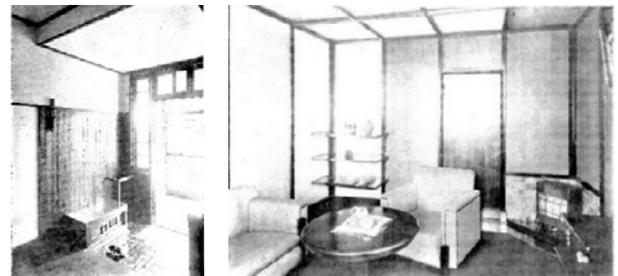


図2 小出邸の平面分析図



a. 外観

b. 玄関前



c. 玄関内部

d. 客間

図3 小出邸

軒の広がりを抑え込んでいる。水平の軒は、南面には強く現れているが、他の3面での現れは部分的である。また、水平軒が施された部分自体のまとまりは弱く、宝形屋根の全体性を部分的に崩すにとどまっている。すなわち、ボリューム構成においては、部分は全体を部分的に崩すにとどまり、全体が部分を抑え込んで統一している。(図3-a)

以上、平面構成とボリューム構成では、部分と全体の関係が相反していることが分かった。

3. 紫烟荘の分析

紫烟荘⁷⁾は馬場の休み場所として計画された、木造一部2階建の住宅である。外観の特徴は、茅葺き屋根の曲線と水平に伸びた軒である。(図6-a)

3-1. 紫烟荘各部屋の概要

玄関のアプローチは、2種類の煉瓦を用いている。玄関には、腰を掛けることのできる靴箱がある。尚、靴箱と一体となった天井までの高さの壁は、浴室の動線の目隠しをしている。

書斎は、居間の一角として空間として居間とつながっているが、居間より低い天井高とされる、部屋として成立している。(図6-b)

書斎を一体化した居間は、洋風の空間となっている。堀口は、幾何学的なモチーフを紫烟荘のなかに多く用いている。インテリアに着目すると、居間の絨毯の柄もそのひとつである。その柄は、三角形の規則的な集合によって円をつくり上げている。また窓にも円形を用いて、空間に統一感を持たせている。その一方で、長椅子は曲線を用いた非対称のデザインとなっている。長椅子や小卓などの家具はデザイン性が高く、『紫烟荘図集』⁸⁾には写真を掲載しており、堀口のこだわりが感じられる。(図6-c, d, e)

料理室は、風呂と隣接し一体となって水回りのまとまりを形成している。

寝室にある壁面の木枠の装飾は、面ごとにズレを生じており、茶室の内装、あるいは、書院造りの違い棚のモチーフを連想させる。(図6-f)

日光室は、居間と暗室と隣接し南に配置されている。さらに、ガラス戸によって居間を介して書斎と繋がっている。(図5)

池やテラスは、矩形の構成によって統一されている。池の飛び石やポンプ室の水平の軒などに、紫烟荘全体の特徴が垣間見える。(図6-g)

3-2. 紫烟荘の平面計画について

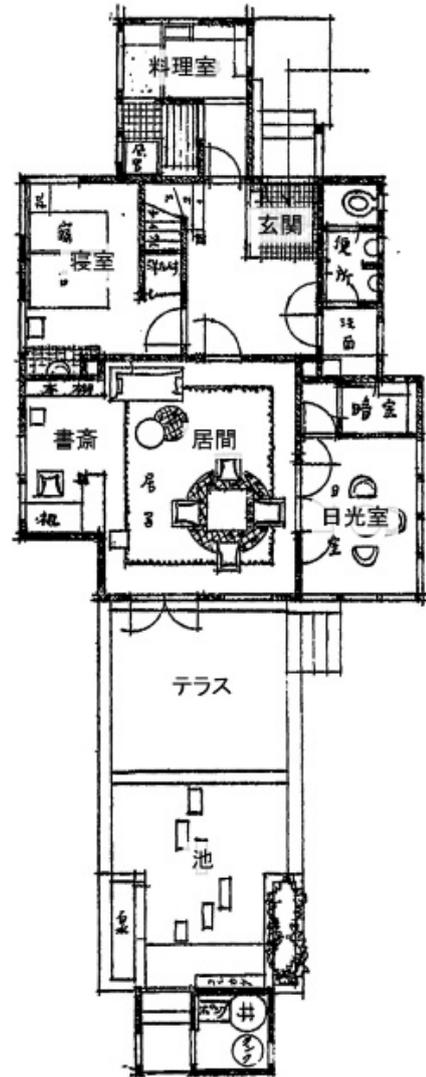
次に、上述した部屋の平面計画上のまとまりを見ていく。紫烟荘の平面は、外形的な枠組みのなかに居間や広間を配置し、この枠組みの外にテラス・池や浴室を付随させる計画である。

枠組みのなかには、様々な大きさの矩形の部屋を配置しており、各部屋のあいだにズレを生じている。寝室は、階段と隣接する上に、空壁によるズレを内部に抱えることで、複雑な平面形態となっている。(図5)

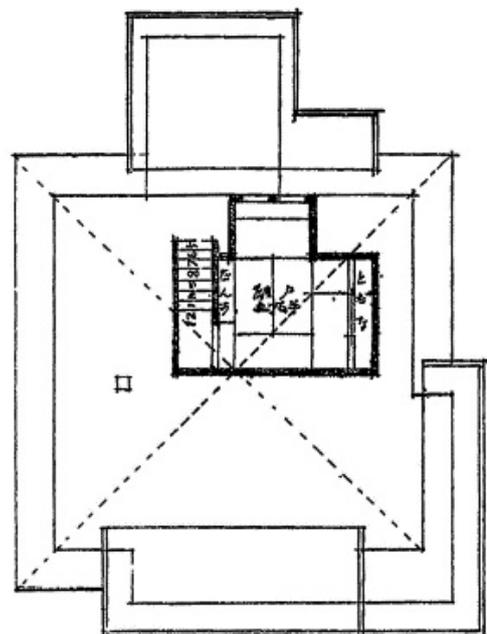
3-3. 紫烟荘の部分と全体について

部屋と家全体に着目し、部分と全体の関係を分析してみる。居間の天井は、規則的な木の格子によって居間全体に統一感を与えている。居間の壁面の木の装飾は、玄関ホールと日光室とのあいだに高さのズレがあり、各部屋の独立性を示唆している。(図6-d)

家全体では、平面計画上、外形的な枠組みによるまとま



a. 1階平面図



b. 2階平面図

図4 紫烟荘平面図

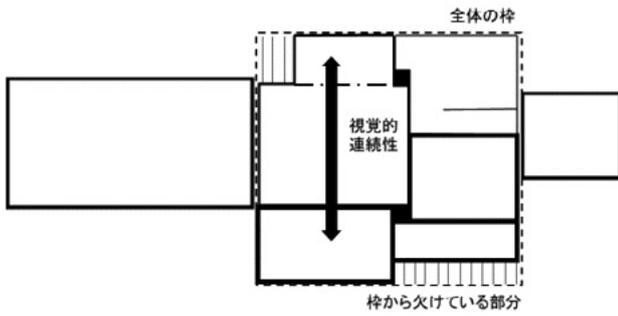
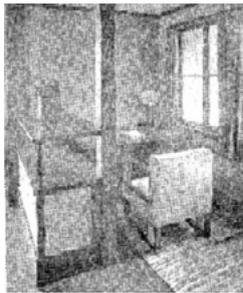


図5 紫烟荘の平面分析図



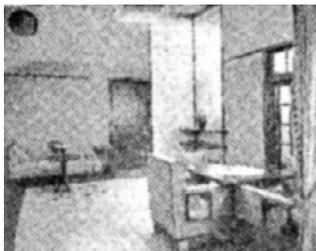
a. 外観



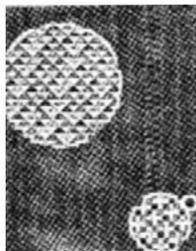
b. 書斎



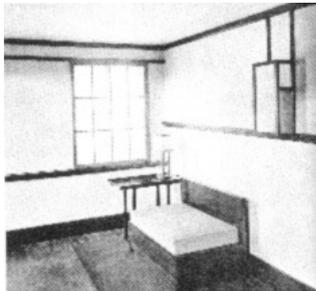
c. 居間1



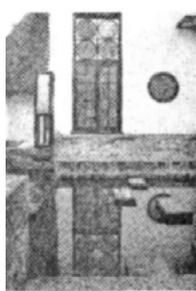
d. 居間2



e. 居間敷物意匠



f. 寝室



g. 池

図6 紫烟荘

りが与えられていた。紫烟荘の平面は全体として、この矩形の枠組みに対して、隅が欠けるところがあるものの、この枠組みのなかに各部屋を配している。矩形の各部屋は、変形した寝室、平面中心に居間を挟んで配された空壁によって、各部屋のあいだのズレを内部で吸収している。

3-4. 紫烟荘の構成的特徴について

最後に、紫烟荘の構成的特徴をまとめてみたい。

平面構成から見ると、矩形の外形的枠組みによって平面全体の統合を図るとともに、その内側で大きさの異なる各部屋のズレを空壁によって吸収していると考えられる。書斎と寝室、居間と日光室の屋外側の面は、この枠組みに沿って揃えられている。矩形の枠組みに対して、欠けた二つの隅部は、ちょうど内部の二つの空壁とバランスしている。この欠けた隅部に変形した寝室も含めて、平面全体が矩形の枠組み内に統合されているように見える。この枠組みの外に付随するテラス・池や浴室は、外部的部分として独立的に扱われている。

平面構成は、外形的枠組みとして働く全体が、個別の部分を内包したり、外に付随させることで、各部分を統合しているものと見做せる。(図5)

ボリューム構成から見ると、部分と全体の関係は均衡していると考えられる。全体は、特異な曲線を描く茅葺き屋根によって特徴づけられている。その一方で、水平の軒を持つ各部屋単位のボリュームが、屋根の全体ボリュームを破って独立している。平面としては屋外側の面が揃う居間と日光室も、個別に水平の軒を与えられて、高さの異なる独立したボリュームであることが示されている。屋根の全体ボリュームの下にある平面枠組みの欠けた隅部、屋根の全体ボリュームの外縁にある浴室周りの低いボリュームも含めて、独立性を高めた各部屋単位のボリュームが、屋根の全体ボリュームによって繋ぎとめられている。

ボリューム構成は、独立性を高めた各部屋単位のボリュームが、屋根の全体ボリュームを破りながらも、これによって繋ぎとめられているものと見做せる。

以上、平面構成では、全体の枠組みを保ちながら各部分を統合し、ボリューム構成では、全体を破りながら各部分を繋ぎとめていることが分かった。(図6-a)

4. 小出邸と紫烟荘の比較分析

小出邸と紫烟荘について、それぞれの構成的特徴を明らかにすることを試みてきた。本章では、この2つの住宅を比較することで、初期住宅作品における構成的特徴の展開を示したい。

まず、各部屋に着目して比較を行う。小出邸においては、書斎に格子の装飾を施していたのに対し、紫烟荘において

は、居間に施している。格子を施した部屋は、その機能として見ると変化しているが、平面計画において中心的位置を占める部屋であることは共通している。(図3-d, 6-c)

次に、平面計画に着目して比較を行う。小出邸は、大きく3つの種類のまとまりによって構成されているのに対し、紫烟荘は、外形的な枠組みの下に部屋を配置している。したがって、小出邸は部屋単位から、紫烟荘は全体から計画していると言える。(図2, 5)

さらに、部分と全体の関係の比較を行う。上述したように、格子は小出邸と紫烟荘に共通して存在する。小出邸の格子は、天井だけでなく壁にも施され部屋全体を統一している。紫烟荘の格子は、天井にのみ施され、壁に施された木の装飾は、天井と異なり、高さがズレており、各部屋の独立性を暗示している。すなわち、格子の施され方から、小出邸では、部屋が部分として完結しているのに対して、紫烟荘では、部屋が全体との関係において捉えられていると考えられる。(図3-d, 6-c, d)

最後に、平面構成とボリューム構成に着目して、構成的特徴の比較を行う。平面構成について見ていく。小出邸では、部屋の独立性が保たれ、部分が全体より強調されている。紫烟荘では、全体が独立した各部分を包摂するように統合している。すなわち、部分の独立性は共通しているが、紫烟荘においては、それを全体によって統合する意図が見られる。(図2, 5, 7)

次に、ボリューム構成について見ていく。小出邸では、部分が全体を部分的に崩すにとどまり、全体が部分を抑え込んでいる。紫烟荘では、部屋単位のボリュームが屋根全体のボリュームを破りながらも、それによって繋ぎとめられている。両者は部分によって全体を崩されているが、部分の独立性によって、部分と全体の関係性に差異が表れている。小出邸では、部分が宝形屋根を崩し、その全体性を弱めている。紫烟荘では、各部屋に部分としてのまとまりを与え、屋根を取り巻いてその全体性と拮抗させている。

(図3-a, 6-a, 7)

以上、小出邸では、部分と全体のどちらか一方にまとまりを与えて、平面構成とボリューム構成において、まとまりの対象を逆転させていた。紫烟荘では、部分と全体それぞれのまとまりを強めるなかで、平面構成とボリューム構成において、部分と全体の関係を互いに補完し合っていた。こうした小出邸と紫烟荘における構成的特徴の差異は、両住宅のあいだにおける構成的特徴の展開と捉え得よう。

5. 結

小出邸と紫烟荘の部分と全体に着目した作品分析によって明らかにされた構成的特徴を、手短かに振り返っておく。小出邸の部分と全体は、平面構成とボリューム構成におい

	小出邸	紫烟荘
平面構成	部分 全体	部分 全体
ボリューム構成	部分 全体	部分 全体



図7 小出邸と紫烟荘における部分と全体の関係

て相反しており、それらに関係付けるに至っていなかった。また、紫烟荘の部分と全体は、平面構成とボリューム構成において部分と全体が包摂し合うように均衡しており、それらの関連付けがうかがえた。堀口は、小出邸から紫烟荘への展開において、平面構成とボリューム構成の関係自体を、自らの制作の問題として捉えるようになったのではないか。(図7)

堀口の住宅作品のなかに位置付けて小出邸と紫烟荘を振り返ると、両作品に共通して部屋内部に部分として現れた幾何学的な格子が、その後の彼の住宅作品においてどのように展開して行くのかという問題に出会う。小出邸において、格子は部屋内部で完結していた。紫烟荘では、格子は内部だけでなく外部にもファサードを分節するモチーフとして現れた。これが、後の岡田邸や若狭邸⁹⁾においては、平面全体、あるいは、空間を統合する枠組みとして展開されるのではないか。稿を改めて論じてみたい。

注

- 1) 堀口捨己『現代オランダ建築』岩波書店、1924年。
- 2) 堀口は、「建築画報」建築画報社、1927年において、次のように述べている。「唯此寫眞を見て思ひ出すのは最近発行しました拙作紫烟荘圖集のなかに現はれて居る手法が、こゝの中に諸所に使はれて居ることですが、いろんな事情で思ふように實現出来ませんでしたので、更らに紫烟荘で試み直したと云つた方がいつわらない心持心です。」
- 3) 本稿に関わる既往研究としては、長岡遊来他「堀口捨己の研究 1930年代の作品を通して」『日本建築学会大会学術講演梗概集』2018年、985-986頁などがある。これは、1930年代の作品に着目し分析を行ったものであり、1920年代の初期住宅作品などは扱っていない。
- 4) 藤岡洋保『表現者・堀口捨己 —総合芸術の探究—』中央公論美術出版、2009年。
- 5) 1996年に解体され、江戸東京たてもの園に移築された。
- 6) 『国際建築』美術出版社、1928年を参考とした。
- 7) 1928年に焼失したため現存しない。

- 8) 堀口捨己『紫烟荘図集』洪洋社、1927年。
- 9) 1933年の岡田邸や1939年の若狭邸は、堀口の中期を代表する住宅作品である。

図版出典

- 図1) 『国際建築』美術出版社、1928年、27頁。
- 図2) 筆者作成。
- 図3-a) 藤岡洋保『表現者・堀口捨己 ー総合芸術の探究一』中央公論美術出版、2009年、33頁。
- 図3-b, c, d) 『国際建築』美術出版社、1928年、21-23頁。
- 図4) 『建築画報』建築画報社、1927年、38、39頁。
- 図5) 筆者作成。
- 図6) 堀口捨己『紫烟荘図集』洪洋社、1927年、342-371頁。
- 図7) 筆者作成。